慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

| | |
|---|---|
| Title | ベルクソンにおける身体の社会性(2) |
| Sub Title | La sociabilité du corps chez Bergson (2ème partie) |
| Author | 西山, 晃生(Nishiyama, Teruo) |
| Publisher | 慶應義塾大学倫理学研究会 |
| Publication year | 2010 |
| Jtitle | エティカ (Ethica). Vol.3, (2010. ) ,p.97- 113 |
| JaLC DOI | |
| Abstract | |
| Notes | |
| Genre | Journal Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA12362999-20100000-0097 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# ベルクソンにおける身体の社会性（2）

西 山 晃 生

## はじめに

ベルクソンにとって物質とは絶え間ない作用の連鎖である。それは厳密な「自然の諸法則」（MM12）に支配されており、そこでは本質的に新しいものは何も生じない。身体とはその作用の連鎖に切れ目をもたらす「不確定性の中心」（MM33）であり、そこから新たな作用が開始される「作用〔行動〕の中心」（MM14）にほかならない。そして、そのことによって身体は「宇宙とその歴史に真に新しい何ものかを付け加える」（MM12）ことができる[1]。作用の連鎖に切れ目をもたらすことができるのは、身体において感覚機能と運動機能が区別されつつ不可分の一体をなすからである。そして、まさにこの感覚機能と運動機能の排他的な組み合わせによって身体は周囲から区別される。と同時に、身体は生きながらえるため、自らと区別された環境との間に「平衡」を保たなければならない（ベルクソンがしばしば言及する「適切な」反応あるいは行動とは、「平衡」を維持するような性質のものにほかならない）。その意味において身体は本質的に社会性を帯びたものである。この身体の社会性[2]は、動物においては本能によって自動的に維持されるが、人間においては知性によって絶えず妨害される。知性は反省を導入することによって人間を「適切な」行動から遠ざけてしまうためである。

前号掲載の論文において、われわれは知性の働きとしてベルクソンの挙げる例（エゴイスム、死への恐怖、予見不可能性に由来する意気喪失）

がいずれも身体の表象にかかわるものであることを指摘した。知性は身体を環境から孤立したものとして表象することによって、「適切な」仕方で行動し環境との間に「平衡」を保つ意欲を人間から奪ってしまう。もしベルクソンがこうした知性の作用に対抗する手段を人間にのうちに見出し、それを「仮構機能 fonction fabulatrice」と名付けるならば、「仮構機能」は身体を孤立から救い出し、環境との「適切な」関係、つまり「平衡」へと向けるような表象を与えるものでなければならない（彼が「効果ある現前 présence efficace」（DS185）と呼ぶのはまさにそのような性質のものである）。

さて、前号掲載の論文においてわれわれが扱ったのは、「仮構機能」がそれとして働く原初的な場面である。そこでは物理的な作用あるいは影響力が「半人格的な諸力 puissances semi-personnelles」（DS207）として現れる。これはベルクソンの「静的宗教」論の原理的な部分であるが、すべてではない。というのも、そこでは宗教へと発展する（かもしれない）起源が論じられてはいるものの、宗教がいかにして成立するかということには触れられていないからである。「効果ある現前」や「半人格的な諸力」が宗教となるためには展開が必要だということをベルクソンは強調する。われわれが注目したいのは、宗教へと至る展開が身体と深いかかわりを持つということである。従って、この展開のありかたを追究することによって、われわれは前掲論文を補完するとともにベルクソンの静的宗教論を、身体を中心とした一貫した視点からとらえることができるだろう。本稿が目指す方向はそのようなものである。

本稿の構成を予告しておこう。第 1 節において、われわれはベルクソンの「静的宗教」論から一つの問題を取り出す。それは信に関わる事柄である。ベルクソンにとって「神々の全体あるいはむしろ神一般は必然的なものであるのに対して、一つ一つの特定の神は偶然的なものである」（DS210）。したがって、ある特定の神を信じることに関しては、ある程度まで人間の意志に委ねられるという。彼が「宗教的真理」（DS211）と呼

ぶのものはこのような種類の信に支えられている。「静的宗教」のあり方を解明するためには、この信がどのような性質のものであるかを明らかにしなければならない。神を信じる、あるいは神の実在性を認めるというとき人間は一体何をしているのかが問題となるだろう。第 1 節ではベルクソンの記述に従いつつその素描を試みる。

第 2 節では、呪術との対比を手がかりとして宗教のあり方に迫る。ベルクソンによれば、呪術と宗教は共通の起源から分岐したものである（DS184）。前者が意志の欠如と怠惰によって特徴づけられる（そしてそのことによって科学と対照される）のに対して、後者においては継続的な努力が求められる。この対比を通じて呪術と宗教それぞれにおける身体のあり方が導き出されるだろう。

第 3 節においては真理が問題とされる。『思想と動くもの』に収められたいくつかの文章は比較的まとまった形でベルクソンの真理観を伝える。その特徴は『物質と記憶』における知覚論や『道徳と宗教の二源泉』における宗教論がそうであるように、行動とのかかわりを強調するものである。常にすでに正しいものとして現れる真理のあり方に、ベルクソンは身体を持った人間が環境との間により有利な関係を確立するために要請されるような真理を対置する。われわれは、このような真理観が「仮構機能」論に引き継がれていることを見るだろう。

以上の議論をもとにして、結論部において「静的宗教」と身体との関係を総括する。

## 第 1 節

「静的宗教」とは「自然のうちに前もって示された préfigurée」（DS223）ものである。それは「知性的存在に固有の不安や誘惑」（DS219）に対抗し、「人間を生へ、従って個人を社会へ」（DS223）結びつける。

このような形でとらえられた「静的宗教」は思弁的なものにとどまることは決してなく、絶えずその実践的な性格が強調される。問題となるのは「静的宗教」によって一体何がなされるかである。このことを踏まえたうえで、宗教的な信のあり方についてのベルクソンの記述に迫ってみよう。

「静的宗教」において信の対象になる個々の神についてベルクソンが述べることは、本人も認めるとおり「今日ではわれわれを驚かせる」（DS211）ようなものである。

> それ〔神〕は実在的なものだった。しかし、その実在性は人間の意志 volonté humaine に属していないとはいえない種類のものだった。（DS210）

> 神々panthéon は人間から独立して現実存在するが、そこにある一つの神を入れるかどうか、そしてその神に現実存在を付与するかどうかは人間に依存する。（DS211）

これらの言葉がわれわれを驚かせるのは、もちろん宗教や信仰といったものに対する通念と相容れないからである。信仰の対象はわれわれを超越しているはずではないのか。もし神が「われわれから独立して現実存在する」ものであるとするならば、その存在の仕方が「人間の意志」に委ねられるという事態をどのように説明すればいいのか。それは神を恣意的に選び取っているだけではないのか。果たしてこのようなあり方を宗教的な信と呼びうるのだろうか。

ベルクソンは宗教というものの無根拠性や相対性を暴きたてようとしているのではない。そうではなくて、ここで彼が棄却しているのは信仰を何か特別な心理状態や知的状態ととらえるような考えである。人間が神を信じるというとき、彼が具体的にしているのは神が存在するとされる世界で日々の生活を営むことにほかならない。神を信じるということの実質を

なすのは、そのような仕方で神と人間との間に確立される関係である。そうした関係は「典礼」「儀式」（DS212）の繰り返しによって実現するだろし、強化されもするだろう。神（あるいは神々）について何らかの表象が得られるとしても、その役割は関係の一部をなすに過ぎない（DS212）。こうして以下のような結論が得られる。

> 神と神へ向けられる崇拝とのこうした結びつきは、宗教的真理を思弁的真理とは共通の尺度を持たない例外的なもの une chose à part とし、ある程度は人間に依存したものとする。（DS212）

だが、われわれの「意志に属」す、あるいは「人間に依存する」といった事態の内実はまだ不明なままである。また、それが「真理」とどう関わるかも明らかにしなければならない。次節ではベルクソンがとらえた呪術と宗教の差異に注目しよう。というのも、彼によれば意志こそがこの両者を分けるからである。

## 第 2 節

『二源泉』第二章の冒頭でベルクソンは「仮構機能」と宗教との関係について以下のように述べていた。

> 小説、戯曲、神話、そして神話に先行したすべてのものがこの機能に属している。しかし小説家や劇作家が常にいたのではないのに対して、人類が宗教なしですませたことはかつてなかった。したがって、あらゆる種類の詩歌や幻想譚は精神が架空の話を作ることができるのを利用して付け加えられたものであるのに対し、宗教は仮構機能の存在理由であるようだ。宗教に関して、この能力は原因ではなく結果であろう。（DS112）

ベルクソンにとって宗教とはまさに「われわれの種と共通の外延を持ち、〔そして〕われわれの構造に由来するに違いない」（DS185）ものである。従って、「仮構機能」によって人間が環境との平衡を保ち、そのことによって社会的動物たりえているだというだけでは不十分だということになる。宗教は社会に偶然的な仕方で付随しているのではないし、社会のありかたが宗教を規定するのでもない。宗教を持つ、あるいは宗教を目指すことによってのみ「仮構機能」はその力を本来的な形で発揮しているといえるのである。

しかし一方で、「仮構機能」論の原理的部分――すなわち知性がもたらす危機に対する自然の対抗措置という説明――を読むかぎりでは、人間と宗教の関係はいまだ明確にされていないように見える。というのも、そこには神々の姿がないからである。原初の光景として与えられる「効果ある現前」（DS185）あるいは「半ば物理的で半ば精神的な」（DS178, 183）負荷を負った物質は、それ自体としては決して信仰の対象とならないだろう。この隔たりを埋めるため、ベルクソンは「仮構機能」が自然の手を離れてどのように展開していくかを描くだろう。われわれの課題はここでもベルクソンの記述において身体が果たす役割を見積もることである。

「仮構機能」によって最初に与えられるもの、つまり「効果ある現前」や「半人格的な諸力」を特徴づける要素は二つある。物理的な影響力と不完全な人格（何らかの「意図」を持っているが、その「意図」を担う人格は見出されない状態）である。ベルクソンの「仮構機能」論に従えば、人間が持つ自らの身体の表象は、「意図」を伴った力が身体を取り囲んでいるという表象と組み合わさっている。この根源的な「意図」の表象から呪術と宗教が分岐するとベルクソンは言う。

> 意図が現前するのを感じると、それ〔人間の意志〕はあらゆる手段を用いて利用しようとするだろう。物理的に有効な点を捉え、物質的な

ものを誇張しさえして力によって支配しようとすることもあれば、精神的な側面に近づいていき、これを人格という反対の方向に推し進め、祈りによってその歓心を買おうとすることもある。（DS187）

前者が呪術、後者が宗教であることは言うまでもない。ベルクソンにとって、呪術は人間の根底にあり、人間は呪術から決定的に離れるということができない。なぜか。それは人間が身体として生きるよう条件づけられていると同時に、時間的にも空間的にも身体の及ばないような行為へと向けられているからである。そこで身体の外にある働きを味方につけ、これに命令しようとする。呪術とは身体の周囲にあるものを延長された身体として意のままに扱おうとする営みにほかならず、そのような意味で「身体の論理」（DS175）に貫かれている。

これに対して宗教が関わるのは人格を持った神々である。人間はその神々から力を汲み取り、これを自らのものにしようとするのではなく、神々に対して「祈り prière によって訴えかけ」（DS183）ようとする。「共通の起源から分岐した」（DS184）呪術と宗教を分けるのは、自らの身体の周囲にあり自らとは区別されるものに対して人間がとる態度にほかならない。呪術は自らのためこれを利用しようとするのに対し、宗教は自らを超えたものとしてこれを崇拝し、従おうとする。つまり呪術は「本質的にエゴイスティックな」（DS183）ものであるのに対して、宗教は「無私を認め、それどころか多くの場合強要しさえする」（DS183）ものである。

しかし、以上のような整理をしつつベルクソンが認めるのは、「呪術と宗教は互いに支えあっているse tienne」（DS171）ということ、そして「それぞれが互いに付きまとい続けている」（DS184）ということである。宗教が何らかの発展段階を経て呪術に取って代わるのでもなければ、両者がまったく別のものとして実際に判明な形で区別されるのでもない。呪術が命令する対象はある程度の個体化されたindividualisés精霊になることもあり、また人間はしばしば命令とも祈りともつかない言葉を発するときがあ

る（DS184）[3]。したがって、ベルクソンにおいて呪術と宗教は相異なる二つの傾向ととらえられている、と見てよい。ここでもわれわれは、共通の起源から出発した複数の傾向が互いの要素を完全には捨て去らないまま分岐していくというベルクソンにはおなじみの図式を目にする[4]。問題は両者の地位である。

実際にこれら二つの傾向を分け隔てていくものは何か。すなわち、呪術が支配的であるような社会と宗教によって特徴づけられる社会とは何が違っているのか。ベルクソンは「仮構機能」の存在理由を宗教に求めたのだから、彼にとっては後者が人間にとって本質的であるはずだ。では、そのように言いうる根拠は何に求められるだろうか。

呪術が相手にする対象と神々との違いは人格性の度合いにあるということに注目しよう[5]。呪術が欲望の延長であり、自分の実際の身体が届く範囲を越えて力を振るおうとする営みであるとするなら、それは必ず特定の状況や場面と関わっているだろう。呪術を行うとき人が目論むのはその時々の状況や場面に応じて自らの外にある力を利用することだろう。たとえそうした状況や場面が類型化され、それとともに動作が言葉に置き換えられたり簡略化されたりすることがあるにしても、である[6]。それに対して人格を持った神はもはや一つの状況のみに関わるのではない。完全な人格を持つということは特定の状況における機能には還元できないということである。呪術が人間の求めているものをそのまま形にしているのに対し（cf. DS210）、神々はそうした欲求や必要から独立しているといってもよい。ここから直ちに以下のことが帰結する。もし神々が人間に接するとしたら、それは状況に即した要求に応えるためではなく、人間の生活全般に関わるためである。神々は絶えず人間を監視し、人間の行為に応じ、報いる力を持つ者と位置づけられる。呪術において身体は世界に対して作用を与える側に立っていたのに対し、宗教において身体は作用を受ける側、あるいは自らに作用を蒙らせる立場に立っているのである。

呪術にとって身体とはすでに完成されたものであり、身体と世界との

関係は変化の必要がないものである。なるほど、たしかに呪術も習慣の形成を要求しはするだろう。しかし、それは「意図」に対して命令を与え、これを意のままに操るという操作と同じ効果を、労力を省いた形で再現しようとしているに過ぎない（DS176-7）。呪術がなしているのは未知のものを既知のものに置き換え、不安を解消することである。たとえば、「ある呪術的な操作の失敗は敵対する何らかの呪術的操作の成功に帰せられるのであるから」（DS181）呪術は見かけ上常に成功している。こうした呪術のあり方を、ベルクソンは無知によってよりも、むしろ無知に伴った怠惰によって特徴づける[7]。足りないのは知識ではなく意志である。

それに対して宗教は不断の変化を人間の身体に求めるだろう。神々がわれわれに要求するものとして生活の隅々にまで現れ続けるということは、怠惰に甘んじることができないということを意味するからだ。身体が感覚運動系であるということだけでなく、またその感覚運動系のあり方が（習慣の形成という仕方で）特定の方向に導かれ、変化しうるというだけでもなく、実際に変化し続けるということが重要である。

この差異は、呪術によって支配される社会と宗教がつかさどる社会との間にも差異をもたらさずにおかない。呪術と宗教はともに社会の結束を強化するものでありうるだろう。しかし、前者が変化しない社会を作り上げるのに対し、後者によってもたらされるのは絶えず変化する社会である。「仮構機能」の同じ原初的働きから分岐するもののうち、ベルクソンが呪術ではなく宗教を本質的なものと考えたのは、人間社会の本性を変化に求めたためである。

変化は意志の力によってもたらされる。呪術が怠惰と変化への意志の欠如によって特徴づけられ、停滞を導くものであるのに対して、宗教が変化をもたらすものであるならばそこには必ず意志が介在しているはずである。「宗教的真理」すなわち神々の存在は怠惰を克服する意志によって支えられていることになる。次節では真理を取り上げよう。

## 第 3 節

「われわれの意志に依存する真理」についてベルクソンが言及するのは『二源泉』が初めてではない。それは彼が旧来の真理観と対決していく中でたどり着いた結論である。以下でその経緯を確認しておこう。真理がどのように捉えられてきたかということについて、ベルクソンは次のように述べる。

> 事物と出来事は特定の瞬間に生じる。事物あるいは出来事の出現を確認する判断はそれらのものの後でしか出てこない。つまり判断には日付がある。しかしこの判断は、あらゆる真理は永遠のものであるという、われわれの知性のうちに根付いた原理によってすぐさま消え去る。現在において判断が真であるならば、それは常に真であったに違いないと思われる。その判断はまだ定式化されていなかったといっても無駄である。それは事実上定立される以前に権利上自ら定立していたのだ。このようにして、われわれはあらゆる真なる言明に遡及的な rétroactif 効果を認める。あるいはむしろ、われわれは逆行的な rétrograde 運動を言明に刻み込む。（PM14）

真理の「遡及」性あるいは「逆行」性は、ベルクソンによれば避けがたいものである。「実在を、論理的な枠組みによって支えられており、完全に首尾一貫し体系化された一つの全体と表象するのが自然である」（PM246）以上、こうした真理の捉え方は「われわれの精神にとって自然であるとともに、哲学にとっても自然」（PM246）なのである。

「論理的枠組み」を「真理そのもの」（PM246）と考えるならば、今まさに生じつつある経験は真理から隔たったものであるよりほかない。従って、真理への問いが発せられるとき、真理は経験とは別の場所で「発見」（PM247）されなければならないし、哲学の仕事はそうした真理を「模写」

（PM244 他）することになるだろう。

ここでの論点もベルクソンの読者になじみの深いものであるように一見思われる。知性に導かれた精神は本性的に物事をすでに出来上がったものとしてしかとらえることができず、生成を見逃してしまうという指摘である。そして、引用箇所の直後ではこうした取り違いに由来する錯覚についても言及されている。しかし、ここで彼が強調するのは何が真理であるかについて複数の捉え方を区別することではない。精神に与えられるのが偽りの、あるいは不十分な真理であり、それらとは別に真の、十全な真理があるということではない。また、真理という概念そのものを棄却することが目指されているのでもない。ここでベルクソンが明らかにしたのは、どのようなものであれ真理というもの自体が人間の精神に根ざしており、人間は真理なしに済ませることができない、つまり真理への問いを発しないわけにはいかないということだ。

では、こうした「自然な」真理観とベルクソンの立場を区別するものは何か。ベルクソンは真理への問いと「模写」「発見」を区別することによって真理観を刷新した、というのがわれわれの仮説である。それは真理を追究する動機に関わる。

われわれは「なぜ真理を追究するのか」という問いに対して根本的な形で答えることはできない。なぜなら、その問いに答えようとするとき、つまりその問いに対して真なる答えを与えようとするとき、まさにそのこと自体によってわれわれは既に真理を追究してしまっているからである。人間の知性は真理への問いに巻き込まれてしまった形でしか働きえず、したがって人間を真理への問いに向かわせる動機を決して明らかにしえない。ベルクソンが目論んだのは、この動機を含みこんだ形で真理を理解することである、とわれわれは考える。というのも、真理について比較的まとまった形で述べたある文章[8]の中で、彼は何が真理であるかより、真理を追究するときわれわれは一体何をしているのかということに注目しているからである。

その文章はウィリアム・ジェームズに捧げられている。われわれが上で述べた、動機を含みこんだ形での真理のとらえ方についてベルクソンは多くをウィリアム・ジェームズに負う。ベルクソンがジェームズのうちに読み取り、定式化した真理観をジェームズ=ベルクソン説と呼んでおこう。それは、端的には以下のような記述に見出される。

> 実在は流れ、われわれは実在とともに流れる。そして、動く実在を通じてわれわれを導きつつ、その実在への手がかりを与え、われわれを行動に最適な条件に置くようなすべての言明をわれわれは真と呼ぶのである。
>
> この真理観と伝統的な真理観には差異が見られる。われわれは通常既に現実存在しているものとの一致によって真理を定義する。ジェームズはそれをいまだに現実存在しないものとの関係によって定義する。ジェームズによれば、真なるものは存在した、あるいはするなにものかを写すものではない。それは、これから存在するものを予告するあるいはこれから存在するものに対するわれわれの行動を準備するものである。（PM245-6）

「いまだ現実存在していないものとの関係」とは、これからなされる行動を有利な方向へ導くため自らと周囲の事物との間に想定される関係にほかならない。このことから、以下の三点が帰結する。

第一に、真理が探究される動機は行動の必要に、つまり生きることのうちに求められなければならない。人間は真理のために真理を探るのではなく、よりよく生きるためにこそ真理への問いを発するのである。

第二に、真理は発見されるのではなく発明され[9]、創造される。旧来の真理観とジェームズ=ベルクソン説の最大の違いは、真理の探究が過去を向いているか未来を向いているかである。人間は自らと世界とのよりよい関係を構想する。真理の探究とはそのような営み以外のものではありえず、

従って既存のもののうちに真理を見出すことはできない。

第三に（以上の二点から）真理はある意味で人間に依存しているのでなければならないし、ある意味では人間から独立しているのでなければならない。その探究の動機から見ていくならば、真理は人間の行動への意志抜きにはありえない。その一方で、真理が人間と周囲の世界との関係によって規定される限り恣意的に考え出されるものではありえず、その意味で人間から独立していなければならない。

こうして、ベルクソンは（ジェームズとともに）新たな真理観へたどり着く。

> 理性と同様感情にも属する真理があると常に言われていた。また、出来上がった形でわれわれが発見する真理と並んで出来上がっていくのを、われわれが助け、部分的にはわれわれの意志に依存する別の真理があるとも言われてきた。しかし、ジェームズにおいてこの観念が新たな力と意志を得たということに注目しなければならない。（PM244）

ここで身体と真理の関係についてまとめておこう。本稿の冒頭で取り上げたような経緯（物質世界に新たな何ものかを付け加えるものという形での導入のされ方）からして、ベルクソンが身体をただあるものと考えていないのは明白だと思われる。なぜなら、ベルクソンにとって、行動〔作用〕にこそ身体の「すべての力が集中するように思われる」（MM65）からである。もし真理が「これから存在するものに対するわれわれの行動を準備するもの」であるならば、身体を持ち、そして未来を見据える知性を持った人間は、それと気づかぬほど自然な形で真理を探究してしまっているだろう。そうした傾向は、身体を通じて周囲の世界と関わっていくという生のあり方そのものに由来する。

## 結論

なぜわれわれは一節を割いて真理の問題を論じたのか。それは、前節で取り上げた真理に関するジェームズ=ベルクソン説がほぼそのままの形で「仮構機能」論そして「静的宗教」論に取り込まれているからだ。周囲の世界から行動に有利な状況を引き出すような表象を得ること。そのことによって人間の行動を、そして生そのものを鼓舞すること。「仮構機能」のこの働きはまさに、ベルクソンがジェームズのうちに見出し深く共感した真理の働きと同一のものである。なるほどたしかに前者は行動を導くために「虚構」（DS111）を頼りとし「一貫して偽である経験」（DS113）を作り出すのに対して、後者は実際に知覚されたものから形成されるという差異はあろう。しかし、問題になるのはそのような差異が際立つ側面ではなく、生を鼓舞するという面のほうである。誤解を恐れずにいえば、宗教において真理であることと「虚構」であることとはまったく矛盾しない。というのも、ジェームズ=ベルクソン説では真理が真であるのは行動に役立つから、つまり人間をよりよい生へ導くからであり、「虚構」は行動に動機づけられない思弁的反省によってのみ偽とされるからである。

ジェームズ＝ベルクソン的意味における真理や「仮構機能」によって形成された表象の実在性は、それらが行動を導くということによって保証される。そして表象から行動への移行が習慣化され、自動的なものに近づけば近づくほど、その表象にはさらにより確かな実在性が認められるだろう。従って、両者の関係は循環したものである。宗教が大きな効果を挙げるのは、儀式や典礼によってこの循環を制度化しているためである。

> 神の観念がひとたび喚起されれば、これを定められた言葉や決められた態度へと延長する習慣によってその像によりすぐれた客観性が付与されることは自明ではないだろうか。（DS213）

人間が信じれば信じるほど神は明確な像を結ぶ。「宗教的真理」が「ある程度は人間に依存したもの」であるのは、まさにこのためである。この循環は個人が習慣を身につけ続けることによって、つまり感覚と運動の特定のつながり方を強化し続けることによって成り立つ。

そして、その作業は共になされることによってより大きな効果を挙げる。なぜなら、多くの人が同じ習慣にもとづいてふるまえばふるまうほど、個人がそれに従うことはより容易に、それに逆らうことはより困難になっていくからである。信仰は個人に帰せられるとしても、個人は社会によって方向づけられ活気づけられている。

> 実際のところ、個人と社会とは相互に含み合っている。諸個人は集まることによって社会を構成する。社会は各人のうちにあらかじめ描かれていることによって par sa préfiguration 諸個人の一側面全体を規定する。従って、個人と社会は循環的な仕方で circulairement 相互に条件付け合っている。（DS209-10）

こうして「静的宗教」においては、同じ身体的努力が二つの仕方で循環をもたらし、それぞれ個人の信と社会の結束を強化する。従って、われわれは最終的に以下のように言いうるであろう。「静的宗教」とは感覚運動的紐帯 lien sensori-moteur[10]、個人と社会の紐帯、そして「人間と神との紐帯 lien entre l’homme et la divinité」（DS214）という、互いに支えあう三つの紐帯 lien を同時に維持し、絶えず強めていくシステムである。そしてその中心には常に身体がある。儀式や典礼といった実践は身体から出発し、身体を作り変え、そして絶えず身体へ立ち戻ることによって宗教的、社会的なものたりえている。

（にしやま・てるお　慶應義塾大学文学部非常勤講師）

＊　ベルクソンの著作からの引用は、以下の略号の後に Quadrige 版の頁数を付した。

MM: *Matière et mémoire*, 1896

DS: *Les Deux Sources de la morale et de la religion*, 1932

PM: *La pensée et le mouvant*, 1934

邦訳は『道徳と宗教の二源泉』（平山高次訳、岩波文庫、1988 年）

『世界の名著 53　ベルクソン』（澤瀉久敬責任編集、中央公論社、1969 年）

『思想と動くもの』（河野与一訳、岩波文庫、1998 年）

を適宜参照した。

1 『物質と記憶』第 1 章におけるベルクソンの身体論は「イマージュ」論の一部をなす。身体とは特殊な仕方で現れる一つの「イマージュ」である。「イマージュ」に関しは多くの文献がある。われわれはとりわけ Worms (1997)、Bento Prado (2002)、Goldschmidt (2002)、石井 (2001) から多くの示唆を得た。ただし、本稿でこれらを詳細に検討する余裕はない。

2 「身体の社会性」という表現は、ベルクソンではなくわれわれのものである。われわれはベルクソンの身体論、とりわけ「平衡」に関する議論は通常用いられる意味における「社会性」―他者との関係や共同体におけるふるまいかた―に関する議論の基礎をなすものと考えている。

3 以下の記述も参照。「神々を自らに与えるのは、たいていの場合それらを利用するためなので、一般的に神々には機能を割り振られ、多くの場合機能の観念が優位を占めるのはごく自然なことである。」（DS200）

4 ベルクソンが明示的な形で述べた例としては『創造的進化』における知性と本能との関係（EC137）など。なおベルクソンにおける分岐する諸傾向については Deleuze (1966) とりわけ第 1 章を参照せよ。

5 人格性は度合いを容れるということに関してはギリシャ神話とローマ神話を比較した箇所（DS203-5）を参照せよ。

6 「しかし，本能的に不在の敵に飛びかかる仕草をなし、自らの怒りが空中に投げ出されて好意的な物質によって運ばれ、開始された行為を成し遂げるということを確信した後に、人が同じ状態になることなく同じ効果を得たがるということは理解される。」（DS176）

7 「…ある種の怠惰に身を委ね、より合理的であることは分かるが知性やとりわけ意志の大いなる努力を多く必要とする説明に背を向けること。」（DS157）

8 Sur le pragmatisme de William James vérite et réalité in PM, pp.239-52. なお、ベルクソンの真理論に関してこの文章に言及したものとして François (2008-1)(2008-

2) を参照せよ。

9 「他の学説にとって新しい真理は発見であるのに対して、プラグマティズムにとって、それは発明である」。（PM247）

10 「感覚運動的紐帯」とは、ベルクソンの身体論を踏まえつつ映画論の文脈でドゥルーズが用いた表現である。詳細は Deleuze (1983) の第 12 章を参照せよ。

参考文献

BENTO PRADO (2002), *Présence et champ transcendental* (traduction du portugais par Renaud Barbaras), Hildesheim.

GOLDSCHMIDT, V (2002), *Cours de Victor Goldschmidt sur le premier chapter de* Matière et mémoire (1960), édités et présentés par Debora Morato-Pinto in Worms (2002), pp.69-128.

DELEUZE, G(1966), *Le bergsonisme*, Paris: PUF, coll « Quadrige », 1998.

DELEUZE, G (1983), *Cinéma 1*, les Ēditions de Minuit.

FRANÇOIS, A (2008-1), *Bergson,Schopenhauer, Nietzsche*, PUF.

FRANÇOIS, A (2008-2), *Bergson*, ellipses.

WORMS, F(1997), *Introduction à* Matière et mémoire *de Bergson*, PUF.

WORMS, F (éd)(2002), *Annales bergsoniennes 1*, PUF.

石井敏夫 (2001)、『ベルクソンの記憶力理論』理想社